

## 「思う」、「思わない」についての一考察

兼 本 敏

### はじめに

外国人が日本語を学ぶ過程でよく問題となる項目に主語脱落文の読み取りがある。主語の脱落および省略は統辞論的な説明を以ておおよそその決着をみる。しかし、学習者にとって脱落した主語の認識は、先ず与えられた文の単語の意味理解、各単語の文法的関係理解がなされ、それから意味解釈が行われ、脱落した主語の発見、補助が可能となる。或いは文の構成要素を文法的に理解しながら脱落主語の可能性を同時に考慮し、可能な限りの文の意味を生成し、再吟味する。

(1) 彼は泣くと思う。

上記の文での解釈は、命題である「彼は泣く」が問題ではなく、「思う」の主語が問題となってくる。文の意味解釈では「思う」の主語が、彼あるいは私、のいずれかであろう。日本人であるならば(1)の主語は私だと答える。しかし、外国人は下記のような意味解釈をしがちである。(岩倉：P.308)

(1') He thinks that he will cry.

(1'') 他想他会哭

これらの解釈は与えられている例文(1)から得られる情報に、「思う」の主語を示唆する要素が「彼」以外ないからである。しかし、次の文例では外国人が犯しがちな過ちが偶然(?)正答となる。

(2) 彼は泣くと思った。

(2)の場合、主語は、彼あるいは私の二つの可能性を残すものの(1)のように私とは断言できない。むしろ彼であると考えるのが自然である。しかし、外国人の場合は、(1)の主語が私でなければならない理由を求める。

日本語学習者である外国人が、「思う」の主語が彼と私の二つの可能性を持っていることをどのように理解すべきかは一般にモダリティについての理解が必要だと言われている。同様

に外国語学習者、特に日本人の中国語学習者は、日本語と中国語のモダリティーに対する理解が必要である。

(3) 我從來没想到他是日本人。(非文)

(4) 真想不到，他是日本人。

例文(3)は来・相原(P.230)によれば「從來」と「没想到」がモダリティー上自己矛盾をつくりだしていると説明されている。日本人が中国語を学習する際も、やはりモダリティーに対する理解が必要であることは否めない。また、(4)は明らかに(我)真想不到、だと認識できる。これは主語の脱落が中国語にもみられる一例であるが、意味の上で「我」が、驚きを表す「真想不到」の主語だと推測できる。

本稿はモダリティーについて日本語の「思う」の中国語対応語を通して「思う」の性質の比較対照を試みたい。比較対照を試みる際、英語を基にすることによって日・中両語の差異だけでなく、その類似性の程度が探索できないかと願っている。英語は、語順が中国語と似てVOであり、日・中両語に例文を求める際、第三言語からの意味的翻訳をすることで、日・中両語のいずれかの言語が持つ特異性から開放され、より客観的観察が可能になるのではないかとと思われるからである。

モダリティーについて

モダリティーの定義

発話された文がモダリティーと命題の二要素で構成されると分析するにはその構成要素が意味論的立場であることが前提である。発話文の目的が到達目標(聞き手)に対して単なる情報の伝達である場合、モダリティーは存在しないと考えられる。その場合、命題である情報は客観化された陳述であると考えられるが、話者は、その陳述命題に対し話者自身の確信、或いは推量などの何らかの心的動向が加わっていると考察され、その心的動向がモダリティーと呼ばれる。しかし、モダリティーは発話時のみに認識され、話者の発話時点での陳述命題に対する心的動向を示唆するものとする。(安井:P.548)

定義によりモダリティーは発話現在時のみに認識される。しかるにモダリティーは時制の制限を受けるとされる。またそのモダリティーは発話者の心的なものであるから私のみが主語となるであろうと予測される。他者の発話文の陳述の場合、それは、他者の心的動向を含む伝達文として取り扱われるであろうし、また、質問文は二人称をとるであろうがその返答文はやはり私が主語となる。

モダリティ表現「思う」・「思わない」の一形態

玄 (P.74) が述べるように中国語の“想”にモダリティ用法と非モダリティ用法がみられるが、その対応は日本語の“思う”とは次の点で異なる。

中国語の“想”のモダリティ用法では (A) 主語の「我」の脱落、省略はない。(B) 否定の“我不想”はありえない。

(A) については、中国語が英語と同様 VO 言語であることと“想”の文法的性質を考えれば、命題の伝達に発話者の心的動向を付加する部分が文頭に位置し、命題を名詞節に引き継ぐ「我想+補語 (名詞節)」が必然的である。

- (5) a. I think that Mr. Lee is a teacher.  
b. 我想李先生是教員  
c. (私は)李さんは先生だと思う。

例文 (5) a. b. は、それぞれ対応している。日本語は主語の脱落が自然な文であろう。次に例文 (5) の否定文をみると、

- a'. I do not think that Mr. Lee is a teacher.  
b'. 我想李先生不是教員  
c'. 私は、李さんは／が先生だと思わない。

a'. と b'. は同じ VO 言語でありながら否定詞の位置が明らかに違う。文 a'. の否定詞を補語部の that clause 内に移動させた文は英語で容認されるが、中国語で否定詞「不」を動詞「想」の否定位置への移動は非文を形成する。

- a'. I do not think that Mr. Lee is a teacher.  
a". I think that Mr. Lee is not a teacher.  
b'. 我想李先生不是教員  
b". \* 我不想李先生是教員 (\*: 非文)

a". から派生されるであろう a'. は、英語において think の持つ意味の強さと中国語における「想」の意味の強さに違いがあると思われる。中国語の場合、「思う (think)」の持つ意味合いが、思考活動そのものからの派生語であり、その活動から完全に独立できない故に「我

不想」の形を取れないと解釈できるのではないだろうか。英語の場合、a ”. が that clause の示す陳述事実（命題）に対する話者の心的動向を付加するという形式から推量するならば、think の持つ意味の強さは中国語のそれよりかなり弱いと言える。言い換えれば、英語の think は思考活動を示す think が持つ本来の意味合いから派生独立しており、モダリティー用法としての陳述命題に対する発話者の心的動向を付加するだけの働きをしていると解釈できる。つまり、陳述命題が否定形あるいは肯定形のいずれをとるにしろ、話者はその内容を既に理解しており、その内容が示す意味に対して話者自身の心的動向を付加して述べている。本例文の場合、陳述命題 Mr. Lee is a teacher. 或いは、Mr. Lee is not a teacher. が理解基準とするならば、話者がその陳述されている文の形に捉われず、その文が意味する Mr. Lee の職業が教員であるか否かに対しての判断をモダリティー文として think を用いて付加すると理解できる。陳述命題に関する話者の理解とは、最初に Mr. Lee is a teacher. が理解基準として有り、それに対立する Mr. Lee is not a teacher. がある。この理解基準に対して話者の心的動向は働くと思われ、予想される。ゆえに、Mr. Lee is not a teacher. に関する話者の理解は、Mr. Lee is a teacher. という意味および文型に対して行われる。

提示文

Mr. Lee is not a teacher. → Mr. Lee is a teacher. (対立文：理解基準)

反応文

I do not think so, either. → (so=Mr. Lee is not a teacher.)

→ \*I do not think that Mr. Lee is not a teacher, either.

→ I think that Mr. Lee is a teacher, either. (二重否定の書換え)

→ I also do not think that Mr. Lee is a teacher. (either の主部への挿入)

→ \*I think that Mr. Lee is not a teacher, either. (either の述部への挿入)

故に、

→ \*I do not think that Mr. Lee is not a teacher, either.

→ I do not think Mr. Lee is a teacher, either. (反応文の書き換え)

上記の例文 think so. が示す so は、提示文 Mr. Lee is not a teacher. に関する意味を示している。しかし、書き換えた文で明白なように提示文に対して話者が何らかの反応を示す時、提示文の文型を重視せずに、それに対する意味判断をし、理解基準である肯定文（対立文）を用いて反応文をつくっている。これは生成文法で説明されている that clause 以下の文中の否定詞が節点（node）への上昇とも合致すると思われる。

一方、英語と同様 VO 語順をとる中国語では、b". は非文となる。

b'. 我想李先生不是教員

b". \* 我不想李先生是教員

しかし、李先生不是教員の提示文に対して予想される反応は次のような二文があり、それぞれの文は次の内容を意味する。

我不這麼想 → 我〔不（李先生不是教員）想〕→ 我〔（李先生是教員）想〕  
→ 我〔想（李先生是教員）〕→ 我想李先生是教員

我也這麼想 → 我〔也（李先生不是教員）想〕→ 我〔也 李先生不是教員 想〕  
→ 我〔想也（李先生不是教員）〕／我〔也想（李先生不是教員）〕  
→ 我想李先生也不是教員／我也想李先生不是教員

また、李先生是教員に対する反応文は次のとおりである。

我不這麼想 → 我〔不（李先生是教員）想〕→ 我〔（李先生不是教員）想〕  
→ 我〔想（李先生不是教員）〕→ 我想李先生不是教員

我也這麼想 → 我〔也（李先生是教員）想〕→ 我〔也 李先生也是教員 想〕  
→ 我〔想也（李先生是教員）〕／我〔也想（李先生不是教員）〕  
→ 我想李先生也是教員／我也想李先生是教員

この様に中国語の場合は、提示文に対する反対あるいは不賛成の意を表す時、提示文をそのまま提示文型どおり受けながら、その提示文に対立存在する文を生成することによって表現を完結している。そのため、「想」というモダリティー動詞自体に何らかの第二の心的動向、即ち「想」の主体である主語「我」の心的動向の否定、をとらない。「想」に対立するはずの「不想」はモダリティー用法の場合、存在しない。この点に関する一般的な説明として、「我想」は純粋な私個人の心的動向の付加であり、対立すべき「我不想」はその心的動向自体を否定するものであるから、意味上、その発話者の存在を否定することになる。言わば「我思う故に我在り」の逆説的考えである「思わないということは、私の否定に通ずる。」という観念が、中国語のモダリティー表現を、このように自己の存在を認めた上で、命題の内容に対する判断を表す用法となる。これは、「想」がその由来である思惟動詞「想」から意味上の派生よ

り用法上の派生によって完成されたとみれるのではないだろうか。

「我不想」が、モダリティー用法上存在しないという現象は、生成文法での否定詞の繰り上げがあてはまらないということになる。これに関して安井 (P.619) は、「that 補文内の否定辞 not は、その命題内容が非既定的なときにかぎり、主節に繰り上げることができる。」との制約を述べている。言い換えれば、既定的内容の命題が補語に否定文の形式で述べられているならば、否定文中の否定詞の主節への繰り上げはおこらない。命題の既定性が問題となる。既定性とは、安井 (P.549) は、「ある事柄の知識（概念、命題）が、発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題として、話し手の意識のなかにあるとき、その知識は既定的である。」と定義する。この定義を前出の例文 b'・b" にあてはめると、やはり中国語の場合、補語によって述べられている命題は既定的であると捉えられ、「想」が否定を伴わないと説明される。

これまで見てきた英語、中国語の「思う」のモダリティー用法は、統語上否定形があきらかに異なる。英語は「思う」に対して「思わない」の存在があり、中国語には「想」のみが存在する。英語が命題をその核とし、それに対する話者の心的動向を付加する形でモダリティー表現を行うのに対し、中国語は話者自身の心的動向が核となり、命題が示す意味内容は話者のみがつ既定的命題と捉えられ、その命題の肯定あるいは否定をもってモダリティー表現を完成させる。

つまり、中国語の場合、心的動向は「我想」に後述される名詞節内の命題に対して話者自身の判断が、肯定・否定の形で示し、英語はその命題の肯定を判断基準として理解し、それに対する話者の心的動向が「think」の肯定或いは否定を付加することでモダリティー表現の完成をみる。いずれの場合も命題の肯定文がその判断基準として理解され、それに対する話者の判断が、「think」の肯定・否定の付加、或いは、命題文の否定・肯定で表すかの違いとなっていると観察できる。

英・中両語とも、VO 言語でありながら、モダリティー表現の上で上記の違いが観察できるが、その違いは、話者の発話時における命題の捉え方に由来するといえる。命題内容を既定的であると捉える中国語に対して、英語が補語部を非既定的命題として捉えるかで表層部での表現が異なっていると考察できる。

ところが、日本語の場合は、次のような文が観察される。

- (6) ア. (私は) 彼は／が私の悪口を言うと思う。  
イ. (私は) 彼は私の悪口を言わないと思う。  
ウ. ? (私は) 彼は／が私の悪口を言うと思わない。  
エ. \* (私は) 彼は私の悪口を言わないと思わない。

例文 (6) のエの二重否定は、理論上は可能であるが、特殊な文学的意図をもつ場合以外、非

文であろう。例文ア～ウは、大江（P.193）によれば「私は」の省略は、主観的な表現が直接的になされていると解釈する。またウに関しては「が」と「・・・言うとは」とするならば認容されると答えたインフォーマントが多かった。これは命題全体の名詞化による命題の主題化確定と捉えられる。

前述の例文で観察できるように日本語は英語のように、主節文に否定詞を用いた文表現方法と、中国語のように主節文が肯定形をとり、補語部に述べられる命題文中に否定形をとる二つの形式がある。更に、日本語特有な主格を示す「は・が」により文の自然さが問題となったりする。

本稿では「は／が」の機能については触れないが、モダリティーを考察する上で必要と思われるそれらの意味解釈上の違いには触れておきたい。命題文中の「は」と「が」については、下記のように観察される。

ア．（私は）彼は私の悪口を言うと思う。

ア'．（私は）彼が私の悪口を言うと思う。

例文アは命題内容に対する一般的陳述であり、彼と彼の行為を含む命題全体に対する話者のモダリティー表現である。それに対して例文ア'は、命題文中の行為の主語が強調されている。アとア'では、発話者と聞き手の前提にある「彼」に対する理解に若干の違いがあると考えられる。アは、話者の彼に対する予測のみであり、ア'では話者の彼に対する推量に何らかの理由があることを示唆させる。同時に話者はその推量の理由が、聞き手がその理由を理解していないと前提していると読み取れる。このように、日本語における「は・が」には話者の命題に関する理解・知識が既定的であることを示唆する働きがあると観察できる。

イ．（私は）彼は私の悪口を言わないと思う。

イ'？（私は）彼が私の悪口を言わないと思う。

例文イ'は、命題が否定文であり、この文は、話者の既定性を含む文と理解される。また、文意の理解基準は提示されている命題文に対立すべき肯定文にある。「彼は私の悪口を言う」が理解基準で、「彼」に属する情報の付加として「言わない」との否定の形式が用いられている。一方「彼が私の悪口を言わない」の命題は、話者の命題に対する認識が例文イとは異なり、大勢の人の中から特定の彼と限定指示した文意となる。この限定指示は、それに後続する述語部分に特異な内容を予測させる。例文の場合、「大勢の人の中で彼だけが悪口を言わない」という意味の読み取りが予想され、「彼以外の人物は悪口を言う」との文意が可能となる。更に、発話者は既定性を含む文型で、話者のみが理解する既定的な知識を前提（大勢の人

が悪口を言う)としている。このような特殊な文意は、一般に使用するとは考えにくい。発話者の彼に対する理解が既定的である場合、日本語が中国語と同様に主節文が肯定形を表すが、イ'のように特異な命題を発話するのは不自然であると思われる。

次に対象となる例文は、英語の場合と同様な表現形式をとっている。しかし、先にのべたように「は・が」の使用が文法的には可能である。

ウ.?(私は)彼は私の悪口を言うと思わない。

ウ'.?(私は)彼が私の悪口を言うと思わない。

インフォーマントの多くは例文ウ'に関して「・・・は」の挿入を提示した。「彼が私の悪口を言うとは、思わない。」である。これは、命題文の主題化を形成するもので、文型の変移と考察でき、本稿とは別途に考察したい。

英語と同様に例文を考察すると、例文ウは、命題が主節の部分で否定される非既定的である。つまり命題は、話者のみでなく聞き手にも既に理解されているものと考えられる。英語の際、観察されたように、文の理解基準は肯定文であり、本例文の提示命題は肯定文である。例文の命題が非既定的であることを示唆する主節部での否定形式と、提示命題に肯定文による命題をもつという両要素から、命題部に「が」が使用されることは、きわめて特殊であると考えられる。この例文ウは、命題文の内容が理解基準と同質であり、その命題が発話者と聞き手の両方に前提として理解されている非既定性を持つ文に、話者が自身の心的動向を付加する場合に生成されると思われる。「は」を用いた表現の例文ウの方が特殊性や強調を示す「が」を使用した例文ウ'より、これまで観察してきた考察に則した文と思える。

## 結 語

英語がモダリティー表現で使用する「think」と中国語の「想」および日本語における「思う」を観察してみたが、同じ語順を持つ英語と中国語が、その否定の形式に違いが有ることが分かった。英語がモダリティー表現部分を主節で肯定・否定のいずれかを付加することで完成するのに対して、中国語は主節部分の否定形式は非文形成となり、その否定形式は補語部の命題文中に示される。英語は補語部の提示命題文が肯定文であり、それが命題に関する意味の理解基準となる。更に、提示された命題は話者と聞き手の両者に共通して既に理解されていると考えられる非既定的なものである。

中国語がその主節で否定形を取らず、補語部に提示される命題を否定することでモダリティー表現を完成させるのは、その提示された命題が話者のみが既に理解している既定性を持つ内容であると考えられるからである。既定的な文は話者の主観性を伴っても当然であり、その文中に話者の断定や否定を含むことの可能性が観察できる。中国語はモダリティー表現の「想」

を主部で肯定形として提示し、話者の否定的判断を補語部で既定性の否定という形式で完成させる。

日本語では、英語、中国語が持つ表現形式の両方を認容する。これは、提示前提が既定的であるか非既定的であるかによって形式を自由にすることになる。さらに主題化機能を有する「は・が」の助詞の働きが、英語および中国語の両表現形式の補語部に提示される命題文を更に既定的に、或いはより非既定的に表現できる。この命題文の意味内容と性格については、おそらく社会言語、言語心理的説明が必要と思われ、今後の課題としたい。

#### 参考文献

- ハシモト, アン・Y (中川正之・木村英樹訳) 1986「中国語の文法構造」『中国語語  
『中国語学研究叢書 1』白帝社
- 岩倉国浩 1974 『日英語の否定の研究』 研究社
- 国立国語研究所(編) 1984 「日本語の文法(上)」『日本語指導参考書 4』 大蔵省  
—— 1985「動詞の意味・用法の記述的研究」『国立国語研究所報告 43』 秀英出版  
—— 1985「現代日本語動詞のアスペクトとテンス」『国立国語研究所報告 82』 秀英出版
- 国広哲弥 1985 「文法」『日英語比較講座 第2巻』 大修館
- 来思平/相原茂 1993 『日本人の中国語 語用例 54例』 東方書店
- Li & Thompson, Sandra A., 1981 *Mandarin Chinese A functional Reference Grammar*  
U. of California Press.
- 大江三郎 1976 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』 南雲堂  
—— 1978 『現代英語文法の分析』 鷹書房
- 大原信一 1991 「新訂中国語と英語」『中国語研究学習双書 14』 光生館
- パーマー, F.R. (安藤貞雄訳) 1972 『英語動詞の言語学的研究』 大修館
- リーチ, G.N. (国広哲弥訳) 1976 『意味と英語動詞』 大修館
- 鈴木重幸 1984 「日本語文法・形態論」『教育文庫 3』 むぎ書房
- 安井稔 1983 「意味論」『英語学大系 5』 大修館
- 玄宜青 1992 「“我想~”と“(私は)~と思う”との対応について」『中国語研究第34号』  
白帝社
- ヤーホントフ, C.E. (橋本萬太郎訳) 1987 「中国語動詞の研究」『中国語学研究叢書 3』  
白帝社